

たしろおおた
国史跡 田代太田古墳2

鳥栖市教育委員会



田代太田古墳の石室内部

装飾文様は後室正面の奥壁と、後室と中室の間にある袖石、中室の右側壁に描かれています。正面腰石（石室の壁に使われている石のうち一番下にあるもの）の大きさは幅約2.3m、高さ約1.1mです。そのほぼ全面に渡って、赤・黒・緑の3色の顔料と石室の材料である花崗岩が風化した岩肌（黄色）を利用した4色の効果を用いて描かれています。赤色顔料はベンガラ、黒色顔料は炭素、緑色顔料は海緑石を使っています。

後室正面の奥壁にほどこされた彩画は腰石の上方から約2/3のあいだに、①三角形を連続して描いた文様（連続三角文様）を4段描かれており、ヘビなどのうろこを表しているとおもわれます。邪をはらう呪術的な意味があるのでしょうか。中央部最上位には、②花卉の内部に緑をいれた花文があり、その両側には③手を挙げている人物（挙手人物像）があります。そのうち左側の人は舟に乗っているかのようです。その下方には④渦巻きのように描かれている文様（蕨手文）・⑤何重にも円を描いた文様（同心円文）や⑥赤色で塗られた騎馬に乗った人物が描かれています。これは北方騎馬民族とのつながりをうかがわせます。蕨手文は外側を赤、内側を緑の輪郭で描き、そのあいだを黒色で塗っています。同心円文と図像は赤色の線で描き、他の色で塗っています。同心円文は4つ描かれており、左から2つ目が他のものよりも強調され、一番右側のものは他に比べて小さく描かれており、四季を表現しているにとることもできます。それらの周囲の空間は緑



田代太田古墳の壁画復元模写

で埋めています。また、腰石の両端には、⑦舟が2艘と⑧須恵器の高杯かとおもわれるものが2個あります。最下辺には、左側に赤色と緑色の連続三角文が、右側には⑨盾が4個並んで描かれています。

後室と中室間の右側の袖石には同心円文や騎馬に乗った人物が狩りをしている風景が描かれ、左側の袖石には同心円文・舟に乗った人物・盾・高杯らしいものがみられます。

以上の構図の特徴は連続三角文様や蕨手文などのような抽象的な文様と人物像のような具体的なものを巧みに配し、一種の物語を表現しているかのようにおもわれます。このような華麗な装飾手法は、五郎山古墳・竹原古墳・珍敷塚古墳(いずれも福岡県)などにもみられます。

この古墳の壁画は、1959～60年(昭和34～35年)に当時の文部省文化財保護委員会(現在の文化庁)の委嘱で、東京芸術大学の日下八光教授により実物大の模写が行われ、1975～76年(昭和50～51年)の2度にわたって、石室を完全密閉し、気温の変化やカビによる壁画の消失を防ぐための保存工事を行いました。

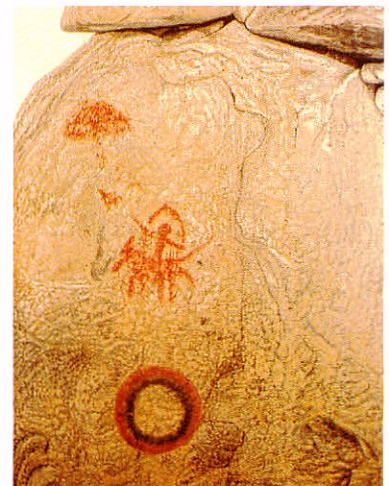
田代太田古墳は、彩色壁画系の装飾古墳ですが、これ以外にも線刻、浮彫などによって石室内に装飾を施す古墳があり、これらは筑後川や有明海沿岸に多く分布しています。



玄室袖石壁画(入り口側) 復元模写



左袖石



右袖石